

平成 24 年度事業報告書

自 平成 24 年 4 月 1 日
至 平成 25 年 3 月 31 日
公益財団法人 微生物化学研究会

公益財団法人微生物化学研究会は、抗結核抗生物質であるカナマイシンの研究成果により創立され、微生物が産生する抗生物質を含む生理活性物質の発見、創製を業務の主目的としてきた研究開発型の公益財団法人である。

爾来、その創立の精神を踏襲し、当研究会の基本業務である研究開発の基本理念は、微生物の多面的な有効利用に関する基礎研究を行い、その分野での最新の科学の進歩に貢献するばかりでなく、更にそれらの成果に立脚して応用研究を行ない、現代社会で人類が健康で幸せな人生を送るために資する化合物を創製し、実用化することである。

平成 22 年度より上記基本業務の拡大を図り、ウイルス研究および医薬品のプロセス研究を開始し、分子生物学、構造生物学の分野においても人材を補充し充実を図ってきた。当研究会の得意分野であり実績もある、微生物、および微生物の構成成分およびそれらの機能、更にはその代謝産物（抗生物質を含む）に関する研究に加え、ウイルスの基礎研究、医薬品の世界的供給を可能とする不斉触媒の研究を行い、広く学会および専門誌上で公開することにより、科学の進歩に貢献する。

次いでこれらの基礎研究の成果に立脚し、応用研究として新規な生理活性物質を発見し、最終的にはこれらの化合物から、社会の要請に応えられる人の医薬品類（特に企業が開発困難な希少疾病用医薬品、難病、新興再興感染症などに関する医薬品類）、家畜の予防および治療薬、農薬（共に世界の食料枯渇を防ぐため）、環境汚染物質浄化剤（地球環境の改善に資する）などの開発研究を行う。更には新規抗インフルエンザ薬の創製、安価で環境調和性の高い医薬品製造法の開発研究を行う。つまり、当研究会で発見し、創製した化合物を現代社会に役立つ化合物へと展開すること、更に医薬品の安価な製造法を開発することにより、“これらの化合物が、現代社会で人類が健康で幸せな人生を送るために資する” 開発研究を行うことを当研究会の最終目標としている。

この基本理念の下で、これまでに当研究会が創製した医薬品としては、抗菌剤のジベカシン、アルベカシン、抗がん剤のブレオマイシン、ペプロマイシン、アクラルビシン、また農薬としてはカスガマイシンなど 14 種あり、既に世の中で幅広く使われてきたという成果と実績を持っている。

平成 24 年度も創立の基本理念に立脚して、以下の成果を挙げる事が出来た。特筆すべきは平成 22 年 4 月 1 日より新体制および新組織の下で研究を始めたことにあり、旧体制下での重要研究課題のさらなる発展と微生物化学研究所ではこれまでに実施されたことのない研究課題を設け、積極的な検討を行っていることである。

特に当研究所が現在最優先で開発中の多剤並びに超多剤耐性結核菌に有効な薬剤に関しては、その次の候補化合物の開発研究も含め、現在も引き続き米国非営利の企業および米国国立衛生研究所との共同研究・共同開発課題として展開中である。本課題は世界保健機構（WHO）が現代における人類の三大感染症として挙げている結核、マラリア、エイズのうち、医療満足度が最も低い疾病である結核に有効性が期待されている薬剤の開発研究である。日米で最大限の努力の下に展開中であり、その成果を疾病で苦しんでいる世界中の患者のベッドサイドに提供したいと願っている。更に、人の市中感染症および重症院内感染症対策として、微生物化学研究所で新たに見出した新規有効物質を、国内のベンチャーおよび企業と共同で、新しい治療薬を目指し、引き続き共同開発研究を行った。

一方、家畜の輸送熱の予防、治療薬の開発研究も、欧州の企業との開発が順調に推移し、2011年に欧州、2012年に米国およびカナダで上市されるに至った。引き続き世界各国で上市される予定である。平成20年度より米国の企業と共同で開始した牛、豚などの輸送熱の新たな予防、治療薬の開発研究を本年度も継続した。早期にその化合物の可能性を見極め、前課題と共に、世界での食用動物の安定供給に貢献したい。

一昨年度からプロジェクト制を導入することにより研究所の様々な研究者が集中的に議論できる制度を確立し、研究課題の積極的な推進と早期見極めを図っている。

本年度には研究の運営効率を高めるために研究協力室を新設し、科学研究費の適正な管理運用に努めている。研究活動の活性化に加え、公益法人として、公益性のある他研究機関との共同研究課題も意識的に取り上げると共に、大学、学会の科学技術の振興対策等への研究助成金の交付および国際交流を引き続き積極的に行った。

本年度の特記事項としては、以下の10点を掲げる。

(1) 超多剤耐性結核菌に有効な感染症薬である CPZEN-45 の開発研究は、日米での共同研究・共同開発課題として国内企業の参画も含め順調に推移したこと。

(2) 当研究所で創製した抗感染症薬であるアミノ配糖体 TS2705 が国内企業との共同開発研究として、その誘導体を含め展開中であること。

(3) 当研究所で創製した動物薬マクロライド抗生物質・チルジピロシン（商品名、Zuprevo）は、外国企業との共同開発が順調に進行し、平成23年の欧州に引き続き、平成24年には米国およびカナダで上市されたこと。

(4) 同じく当研究所で見出したアミコラマイシンは米国の企業および国内企業との共同研究で動物薬としての開発研究が継続中であること。

(5) 抗感染症薬、抗がん剤の基盤研究の中から数種の有効な化合物が見いだされたこと。

(6) 当研究所と国内企業2社とが共同で開発したスパニジン（グスペリムス塩酸塩製剤）は国内で腎移植後の拒絶反応の治療剤として使用されている。本剤の外国企業への

ライセンス契約によりウェゲナー肉芽腫症をはじめとする自己免疫疾患の治療薬として、欧州を中心に臨床開発が実施されていること。

(7) リレンザの純化学的合成に世界で初めて成功したこと。

(8) L-グルタミン酸誘導体を出発原料とした新規タミフル合成ルートを確立したこと。

(9) 公益法人として、昨年度に引き続き当研究所の業務に関連する研究に対して助成を行ったこと。

(10) 以下の公的研究費を獲得したこと。

(1) 日本学術振興会 基盤研究 (B)

ポリオウイルスへの血液脳関門透過機構と運動神経細胞への特異的感染機構の解析
野本 明男

(2) 厚生労働省 難治性疾患克服研究事業

脊髄性筋萎縮症の臨床実態の分析、遺伝子解析、治療法開発の研究
野本 明男 (分担者)

(3) 日本学術振興会 基盤研究 (S)

多核金属触媒の創製を基盤とする医薬合成の革新
柴崎 正勝(分担者 熊谷直哉)

(4) 日本学術振興会 特別研究員奨励費

実用的な触媒的不斉ニトロアルドール反応によるリレンザの触媒的不斉全合成
柴崎 正勝・Chaudhary Sandeep

(5) 日本学術振興会 特別研究員奨励費

酸塩基協奏触媒による環境調和型新規不斉反応の開発
柴崎 正勝・Devarajulu Sureshkumar

(6) 日本学術振興会 特別研究員奨励費

Caprazamycin の触媒的不斉全合成
柴崎 正勝・Gopinath Purushothaman

(7) 独立行政法人 科学技術振興機構 研究成果展開事業

タミフルの全世界安定供給に向けた新規工業的合成法の開発
柴崎 正勝

- (8) 文部科学省 新学術領域研究
がん微少環境を制御する低分子プローブの開発
川田 学
- (9) 日本学術振興会 基盤研究 (C)
癌-間質相互作用を標的とした抗癌剤の創薬基礎研究
川田 学
- (10) 文部科学省 新学術領域研究
がん研究分野の特性等を踏まえた支援活動
川田 学 (分担者)
- (11) 独立行政法人 科学技術振興機構 次世代がん研究戦略推進プロジェクト
がんエピゲノム異常を標的とした治療・診断法の開発 (シード化合物の毒性試験及び体内動態の解析)
川田 学
- (12) 日本学術振興会 基盤研究 (C)
インビボイメージングを用いた経口投与可能なプロテアソーム阻害剤の開発
百瀬 功
- (13) 独立行政法人 科学技術振興機構 次世代がん研究戦略推進プロジェクト
がん微小環境を標的とした革新的治療法の実現 (微生物二次代謝産物からの候補化合物の精製)
百瀬 功 (分担者)
- (14) 日本学術振興会 基盤研究 (C)
核酸系抗生物質Caprazamycinの触媒的不斉全合成
渡辺 匠 (分担者 柴崎正勝)
- (15) 文部科学省 新学術領域研究
神経特異的RNA結合蛋白質とmicroRNAによる翻訳制御機構の解明
藤原 俊伸

- (16) 日本学術振興会 基盤研究 (B)
MAPキナーゼシグナル制御機構の解明とケミカルゲノミクスへの展開
藤原 俊伸
- (17) 長瀬産業
多目的バイオセンサーとしての人工核酸創製
藤原 俊伸
- (18) 日本学術振興会 若手研究 (A)
オートファジー特異的 E1 酵素 Atg7 の構造的基盤
野田 展生
- (19) 文部科学省 新学術領域研究
天然変性タンパク質 Atg13 によるオートファジー始動の制御機構
野田 展生
- (20) 日本学術振興会 特別研究員奨励費
オートファジーの始動を制御する ATG1 キナーゼ複合体の分子機構の解明
野田 展生・藤岡 優子
- (21) 日本学術振興会 基盤研究 (C)
チオアミドを活用するダイレクト型触媒的不斉 C-C 結合形成反応と医薬品合成への
応用
熊谷 直哉
- (22) 文部科学省 新学術領域研究
適時構造・機能変化型触媒系を用いる多段階促進型反応の開発
熊谷 直哉
- (23) 日本学術振興会 挑戦的萌芽
神経性ウイルス粒子の脳移行における分子機構の解析
二瓶 浩一
- (24) 日本学術振興会 挑戦的萌芽
人工多能性幹細胞由来神経細胞を用いたウイルスベクターによる脊髄性筋萎縮症の

治療

荒川 正行

- (25) 日本学術振興会 若手研究 B
p53 依存的、非依存的細胞死を誘導する化合物の探索及び開発
立田 大輔
- (26) 日本学術振興会 若手研究 B
光反応性アミノ酸を利用した生理活性低分子化合物の標的タンパク質同定法の開発
小細胞肺癌の新規骨転移モデルの開発とそれを活用した転移機構の解析
中栄 功一
- (27) 日本学術振興会 若手研究 B
水圏多細胞生物共生、寄生微生物からの抗腫瘍物質の探索
和田 俊一
- (28) 日本学術振興会 若手研究 B
小細胞肺癌の新規骨転移モデルの開発とそれを活用した転移機構の解析
坂本 修一
- (29) 文部科学省 新学術領域研究
天然物リガンドを利用した間葉系幹細胞の分化制御機構の解析
坂本 修一
- (30) 日本学術振興会 基盤研究 C
天然物リガンドDNTによる特異的な前立腺癌増殖阻害の作用機序解明
山崎 洋子
- (31) 日本学術振興会 若手研究 B
バンコマイシンよりも優れた治療効果を示すトリプロペプチンCの作用機序解析
橋爪 秀樹
- (32) 日本学術振興会 挑戦的萌芽
インフルエンザウイルスポリメラーゼの構造変化抑制を作用原理とした新奇阻害剤

の同定

山崎 学

- (33) 独立行政法人科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業（新技術シーズ創出）

HIV 感染の迅速検出法と潜伏感染化ウイルスの予後予測法確立

水谷 壮利

- (34) 独立行政法人科学技術振興機構 先導的物質変換領域

先進的・実践的協奏機能型不斉触媒の開発と医薬合成の刷新

柴崎 正勝

- (35) 日本学術振興会 研究活動スタート支援

ポリオウイルスの組織特異的増殖を抑制するIRES依存的な翻訳機構の解明

佐藤 亮介

- (36) 日本学術振興会 特別研究員奨励費

ケトイミンへの触媒的不斉アルキニル化反応の開発

柴崎 正勝・YIN Liang

- (37) 鈴木謙三記念医科学応用研究財団 調査研究助成

協奏機能型不斉触媒を駆使する脂質異常症治療薬の短工程不斉合成とケミカルバイ

オロジー

熊谷 直哉

- (38) アステラス病態代謝研究会

早老症原因遺伝子WRNによる新規転写調節機構の解明

石坂 彩

(39) 上原記念生命科学財団 研究助成金

がん間質を標的とした新しい抗がん剤の創製

川田 学

(40) 倉田記念日立科学技術財団 倉田奨励費

新規カルベン含有アミド配位子／希土類金属型不斉協奏触媒の開発

熊谷 直哉

詳細内容は附属明細書に記載した。